

あはて、弱い翅をひらつかせたものだ。

十幾年か見忘れてゐた花を見つけて、なつかしく眺める。こゝにもおなじ蜻蛉が舞つてゐる。

宿に來た翌る日、床柱の花壺に婢が投入して行つた夏菊も、下枝に枯葉が見えそめた。急に未央柳がほしくなつて折つて貰ふやうに頼むと、危なげに屋根を渡つて行つた婢は、眩しさうに、危なくて手が届かぬといふ。仕方なしに座敷に戻つて、客のない表二階へ吹き通す涼風に、また退屈な眼をつむる事にすゝる。

○

遊廓の門に雨が降つてゐる。門の傍に「一遍上人御誕生舊跡、寶嚴寺」と彫りつけた石が建つてゐる。寺へ行くには否が応でも遊廓を通り抜けねばならぬ。即ち通る。午後三時廓は昼寢の時刻である。格子の間から、講談本を読んでゐる女や、昼を吊つた青い蚊帳が見える。

坂の二階の欄干に腰をかけながら、顔を突合せて喧嘩をやつてゐる男女がある。隣り近所の格子や掛行燈の陰から、女たちの寝起きの顔が重なり合つて覗いてゐる。蒼くなつた男の顔が知つてゐる俳人某氏にそっくりなのが面白くて、宿の番傘を担いだまゝ、往來の真中に立つて遠慮なく二階を見上げる。女は平然と美しい顔を町に晒して、激怒に震へてゐる男の顔に、吐き捨てるやうに毒舌を振つてゐる。男はや、しどろもどろである。面白さうだが、番傘が重くて肩が痛くなつたからまた歩き出す。

左右三十軒程で廓が尽きて裏門を出ると、小さな商ひ店と百姓家が四五軒、更に一二軒の娼家がある。この辺りはすでに山中で谷川の水が家の裏を音たて、流れてゐる。娼家の軒下の南瓜畑には黄色い鄙びた花が咲いてゐて、山に向つて一面に墓地が拡がつてゐる。廓は昔時の衆坊の陣跡である。

傘を傾けて寺門をくゞつて見たが、一向につまらない。止むなく練堀際に咲いてゐる著菝の花を摘んでみると、話し声が墓地の方から聞えて來た。練堀の上から首を出して見ると、墓地の芝生の上に、浴衣の男が二人雨に打たれて話してゐる。

「一ぺんだつて何した事はあらへん、たゞ一ぺん五円貸せへといつたばかりや」

といふやうな高い声が聞える。こゝにも興奮した人がゐる。それを連れの男がしきりに宥めてゐるらしい。聽て二人はやはり雨の中を濡れながら廓の方へ戻つて行つた。察するに、何か面白くない事があつて今後の方寸を相談しに昼の廓を脱け出して來た二人らしい。

廓を後戻りして、町を外れて山に入る。草の中に野萩や薊が咲いてゐる。薊が美しかったから、寺で摘んで來た著菝を捨て、薊を四五本と梶に絡んだ山藤の花を一本折つて、浴衣の裾を濡して宿に帰る。

○

松山へ往復する明るい電車は、いつも温泉へゆききの人で込合つてゐる。夜の電車は涼しい。道後を出て城山の頂の灯が見えそめると、両側の田圃に蛙の声が喧しく聞えだす。